

## エルゼ・フォークトレンダーの愛の現象学

八重樫 徹

### はじめに

初期現象学派に数え入れられる女性哲学者の中から、長年にわたって限りなく無視に近い扱いを受けてきたエルゼ・フォークトレンダー (Else Voigtländer, 1882-1946) を取り上げ、特に彼女が 1933 年の論文「心情の心理学についての覚書」(Voigtländer 1933) で展開しているエロスの愛 (erotische Liebe) についての議論に焦点を当てる。

「初期現象学における女性——情と社会という観点から」という特集の枠内で特にこのテーマを選んだ理由をあらかじめ述べておきたい。人が他人とかかわりあう情緒的・道徳的生活の中での愛の役割に注目した初期現象学者には、フッサール、シェーラー、ヒルデブラントなどがある。これらのいわば現象学運動のメインストリームに属する哲学者たちが愛に与えた説明には欠けているように思われる観点が、以下で論じるように、フォークトレンダーの議論の中には見いだせる。そこからわれわれは「愛の現象学」の未必の可能性を取り出し、展開することができるだろう。これが第一の理由である。第二に、フォークトレンダーの業績はその重要性に比して十分に評価されてこなかった (その原因については後述)。しかし近年、主にヴェンドレル＝フェランの仕事 (Vendrel-Ferran 2008, Vendrel-Ferran 2020) により、再評価の動きが起こりつつある。そうした背景から、この機会にフォークトレンダーを取り上げることに意義があると考えられる。

本稿の目的は、フォークトレンダーによるエロスの愛についての議論を紹介するとともに、その独自性と射程を明らかにすることにある。まず前置きとして、フォークトレンダーの人生と業績を紹介する (1)。次に、彼女がエロスの愛をどのようなものとして考えたのかを説明する。彼女が焦点を当てているのは心情 (Gesinnung) としての愛の一種であるが、この限定は師であったプフェンダーの心情心理学を背景としている。それゆえ、彼の心情心理学の要点についても必要最低限の説明を与える (2)。フォークトレンダーの議論の中で特に興味深いのは、エロスの愛とそれが向かう対象人物の価値との関係に関するものである。そこで彼女がどのような立場をとり、対立する立場をどのように批判しているのかを見る (3)。最後に、彼女の議論が同時代の現象学運動の文脈において持っていた、あるいは持ちえた意義について論じ、さらに現代の愛の哲学にとって持ちうる意義を評価する (4)。

## 1. エルゼ・フォークトレンダー：人と作品



図 1 フォークトレンダー 晩年の肖像画

エルゼ・フォークトレンダーは出版業を営む父の双子の娘の一人として、ドイツ西部の町クロイツナハに生まれた<sup>1</sup>。1888年に一家はライプツィヒに移る。1903年にギムナジウムを修了し、おそらくライプツィヒ大学で学んだ後、エルゼは1905年にミュンヘンに移り、リップスとプフェンダーのもとで哲学と心理学を学ぶ。1909年に博士号を取得。現象学運動の関係者の中では最初の女性の博士号取得者となった（ちなみに双子のもう一人であるエミーも三年後に美術史で博士号を取得している）。博士論文は『自己価値感情の諸類型』（Voigtländer 1911a）として、父の営む出版社から刊行されている。

その後フォークトレンダーはフロイトの精神分析に関心を向け、それに関する論文（Voigtländer 1911b）を書いているほか、短期間だがベルリン精神分析協会（BPV）の準会員となっている。遅くとも1918年には精神科医アダルバート・グレゴールの助手となり、母親による育児放棄とその影響などに関する臨床研究に従事する。グレゴールとの共著書（Gregor & Voigtländer 1918, Gregor &

Voigtländer 1922）を出版し、マックス・マルクーゼが編集した性科学辞典（Marcuse 1926）の項目執筆などもおこなっている。

大学に所属しない研究者としてキャリアを積んできたフォークトレンダーだが、後半生の職業は意外なものだった。1925年もしくは1926年から、彼女はヴァルトハイム刑務所女性部の施設長を務める。彼女がこの職に就いた経緯は定かではないが、当時女性心理学を専門とする希少な女性研究者の一人であったことが関係していると推測できる。ナチス政権下でも勤め続け<sup>2</sup>、1945年5月に同刑務所が赤軍によって「解放」されるとともに職を失う。肺水腫によりヴァルトハイムの自宅で死去したのはその一年後だった。

以上からわかるように、フォークトレンダーのキャリアと業績の大部分は、今日で言う臨床心理学者としてのものである。ここに彼女が哲学者として評価されてこなかった原因の

<sup>1</sup> 以下の伝記的記述は Hackl 2016 と Nölleke 2007 に基づく。図 1 は Hackl 2016: 269 からの引用である。そこでのキャプションによれば、この肖像画は政治犯としてヴァルトハイム刑務所に収監されていたチェコ人の女性画家ミラダ・マレショヴァ（Milada Marešová, 1901-1987）によって1945年に描かれたものである。フォークトレンダーの姿が写っている写真は知られておらず、肖像画もこれが唯一のものである。

<sup>2</sup> ナチス政権下の同女性刑務所については Hackl & Sack 2016 に詳しい。刑務所勤務時代のフォークトレンダーについては、1937年にナチ黨員になっていること、ナチズムに一定の共感を示していたこと、また囚人の証言によれば彼女は特に威圧的な人物とは見られていなかったことが知られている（Hackl 2016: 270-271）。

一端がある。たとえば歴史上の女性哲学者についての網羅的なハンドブック (Waithe 1995) にも、フォークトレンダーに関する項目はなく、それどころか一度の言及すらもない。彼女に関する伝記的な記事は女性精神分析家に関する文献 (Nölleke 2007) と、彼女が施設長を務めた女性刑務所についての研究書 (Hackl & Sack 2016) くらいにしか見当たらないのである。

しかし、フォークトレンダーは博士論文以降も、刑務所に勤めていた 1933 年に至るまで、現象学派の哲学的心理学に数え入れることのできる論文をいくつか発表している。その内容の一部を以下で紹介する彼女の哲学的著作は、独創的で深い洞察を含んでおり、議論は明晰である。にもかかわらず、彼女の業績に同時代の哲学者が言及した例は見当たらない。おそらくそのせいもあって、後の哲学史研究においても彼女は無視され続けてきたのである。同時代において彼女が軽視された原因は、少なくとも部分的には、彼女が一時期精神分析に接近したことにあると推測できる。フロイトとその一派は当時、ドイツ語圏のアカデミズムの世界では相当嫌悪されていたはずだからである。また、当時女性研究者がアカデミズムの周縁に置かれていたことも無関係ではないだろう。近い世代の他の女性現象学者であるシュタイン、ヴァルター、コンラート＝マルティウスらと同様、フォークトレンダーも大学でポストを得ることはなかった。しかし、シュタインらが当時から哲学者として (少なくとも現象学運動のメンバーからは) 高く評価されていたのに比べると、フォークトレンダーに対する無視と呼んでよい扱いは不当に思える。こうしたことから、彼女を哲学者として再評価することは哲学的観点から言って必要である。また後述するように、そうすることは現代の愛の哲学にとっても有益だと考えられる。

## 2. エロスの愛とは何か

本稿で主に取り上げる「心情の心理学についての覚書」は、フォークトレンダーの旧師プフェンダーへの献呈論文集に収録された論文である。タイトルに反して、心情一般ではなく、エロスの愛という特定の心情が焦点となっている (友愛 (freundschaftliche Liebe) についても最後に少しだけ論じられているが、本稿では扱わない)。

フォークトレンダーがエロスの愛と呼ぶものは、われわれが「恋愛感情」と呼ぶものに相当すると考えてよい。これを彼女はプフェンダーの意味での心情 (Gesinnung) の一種とみなす。プフェンダーの心情論は主に『心情の心理学』 (Pfänder 1913/1916) で展開されている。彼によれば心情とは、感情 (Gefühl) と呼ばれる体験の中で、以下の本質的特徴を備えた体験のクラスである。第一に、心情は自我中心から対象へと向かう遠心的方向づけを持つ。この点で心情は、求心的方向づけを持つ快や苦痛の感覚から区別される。第二に、心情は動的な心的プロセスであって、静的状態ではない。したがって心情は一般に「遠心的流れ (zentrifugale Strömung)」という性格を持つとプフェンダーは表現する。第三に、心情は肯定的もしくは否定的な質をもつ。たとえば好意は肯定的、敵意は否定的な心情である。第四

に、心情は、そのうちで体験者が対象との一致 (Einigung) もしくは分離 (Entzweiung) を体験するような感情である。ある心情はその対象が自分と一体であるかのように感じさせ、別の心情は対象をよそよそしいものとして感じさせる。第五に、心情は顕在的、潜在的、習慣的のいずれかの様態で意識のうちに存在する。同じ心情でも、ある瞬間の心的生の顕在的な構成要素になっているとき (比喩的に言い換えれば意識の前面に出ているとき) もあれば、背景に沈んでいるときもある。前者の様態にある心情は顕在的心情、後者の様態にある心情は潜在的心情と呼ばれる。習慣的心情とは、顕在的な様態と潜在的な様態を貫いて持続的に人が抱く心情である。顕在的心情と潜在的心情はあるとき心のうちに生起していたりいなかったりするプロセスであり、習慣的心情はある期間人が持っていたり持っていなかったりする傾向性 (disposition) であると言える<sup>3</sup>。プフェンダーが心情一般に与えている特徴づけは他にもあるが<sup>4</sup>、少なくとも以上の五点にはフォークトレンダーも同意しており、議論の前提としている<sup>5</sup>。

さて、フォークトレンダーによれば、心情のさまざまな下位区分の中に「愛着および嫌悪 (Zu- und Abneigung)」としてまとめられるクラスがあり、そこには愛と憎しみ、共感と反感が含まれる (Voigtländer 1933: 144)。好意や敵意はここには含まれない。この区別を説明することによって、フォークトレンダーは愛の概念を明確化しようとする。好意 (Wohllwollen) とは違って、愛は自分と対象の距離をより近づけようとする作用を含む。そうした作用は相手を自分の方に引き寄せる (Heranziehen) ものである場合もあれば、自分から相手に近づいていく (Heranrücken) ものである場合もある。また、愛は相手の存在への肩入れ (Parteinahme) を含む。肯定的な心情はどれも対象の存在を肯定する作用 (Bejahungsakt) を含むが、愛が含む肩入れは特殊な肯定作用であり、フォークトレンダーによれば、たんなる好意には欠けている (Voigtländer 1933: 145)。この特徴を別の仕方で表現するなら、好意とは違って愛は「人格的 (persönlich)」な心情だということになる。より日常的で、陳腐に聞こえるかもしれない言い方をあえてすれば、人が一個の人格として相手を大切に思い、相手の近くにあるようにするのが愛だ、ということになるだろうか。

愛にもさまざまなものがある。いわゆる恋愛感情と、親への愛や子供への愛はそれぞれかなり異なる心情だろう。特定の人に向けられるわけではない人類愛のようなものもある。伴

<sup>3</sup> ただし、習慣的心情を心情と呼ぶことは、心情がプロセスであるという第二の特徴づけと矛盾するように思われる。これが矛盾でないとしたら、プフェンダーは内容的に変化しつつ同一にとどまる傾向性という複雑な (奇妙な?) ものを想定していることになると思われるが、明示的にそのようなことを述べてはいない。だが、第二の特徴づけは顕在的心情と潜在的心情にのみあてはまると考え、習慣的心情は心情と呼ばれはするが存在論的には別のカテゴリーに属すると考えることもできる。実際、プフェンダーが心情という語を限定なしに用いるときには顕在的心情を意味しており、『心情の心理学』の記述の大部分は顕在的心情に関するものである。

<sup>4</sup> プフェンダーによる心情一般の特徴づけについては、八重樫 2019: 86-87 も参照されたい (Uemura & Yaegashi 2020 もほぼ同様の説明を含む)。そこでの記述は本稿のものと (矛盾はしないが) 内容的に若干異なる。この違いは、同論文がプフェンダーの心情論のあるトピックを主題としているのに対して、本稿はフォークトレンダーの愛についての議論を主題とし、その背景として必要なかぎりプフェンダーの心情概念を導入しているためである。

<sup>5</sup> フォークトレンダーの哲学的感情心理学の全体については、Vendrel-Ferran 2020 が手際よく紹介している。

侶動物への愛、音楽への愛、祖国への愛のように、人を対象としない愛もある。フォークトレンダーが焦点を当てるエロスの愛はさまざまな種類の愛の中の一つである。しかし、彼女はエロスの愛を定義し、愛の下位クラスとして明確に切り出しているわけではない。おそらくその理由の少なくとも一部は、同じエロスの愛でも個人の性格によって体験のされ方がかなり異なるという事実のうちにある。フォークトレンダーは人の性格に強い関心を持っていた。性格がどのように形成され、心的生活にどのような違いをもたらすのかといったことへの関心が彼女をより経験的な心理学に向かわせたとも考えられる<sup>6</sup>。この1933年の論文でも、彼女は愛一般の現象学的本質分析を行いつつも、本質を断定的に取り出すことには慎重である。エロスの愛についての以下の説明は、人の性格による違いをかなりの程度認めつつも、「愛の中でも特にエロスの愛にはしかじかの傾向がある」といった論調で進められる。

たとえば、心情は「親密さ (Intimität)」というパラメータを持つとされ、エロスの愛は愛の中でもとりわけ親密な心情であると言われる (Voigtländer 1933: 148)。親密な心情とは、プライベートなものとして、他人に対して隠された (あるいは隠すべき) ものとして体験されるような心情である。もちろん、恋愛感情がどれだけ隠すべきものとして感じられるかは、文化によっても、感じる個人の性格によっても、またそのつどの状況によっても、変わってくるだろう。しかし、たとえば子供に対する親の愛などと比べて、エロスの愛はよりプライベートなものとして体験される傾向がある、というのがフォークトレンダーの言わんとしていることだろう。

また、心情が潜在的様態から顕在の様態に移行する仕方は、心情の種類によって異なる。刺激へのたんなる反応として顕在化するものから、刺激と関係なく心の奥底から——フォークトレンダーや彼女が属するリップス学派の用語で言えば、「自我中心」から——自発的に顕在化するものまで、グラデーションがある。好意や敵意はどちらかと言えば受動的に顕在化する。対象が目の前に現れると心情が顕在化するが、目の前にいないときはどうでもよい (あるいはその対象のことを考えもしない) という具合である。だが、愛や憎しみはそうではない、とフォークトレンダーは言う (Voigtländer 1933: 149)。相手が目の前にいないときでも勝手に気持ちが湧き上がってどうしようもないことがある。特にエロスの愛にはこの特徴が顕著である。

以上でフォークトレンダーがエロスの愛に与えている特徴づけの肝心なところは押さえることができたように思うが、次節に移る前に、1933年の論文の脚注で述べられている興味深い論点に触れておきたい。そこで彼女はエロスのなもの (Erotik) の性的なもの (Sexualität) への還元を反対している。ジンメル「愛についての断章」 (Simmel 1921) を引用しつつ、彼のように愛の精神的性格を強調する論者さえもが、エロスの愛をもっぱら性的衝動に由来するものとして捉えていることを、彼女は批判する (Voigtländer 1933: 151 fn.)。たしかに、エロスの愛が性的衝動の影響によってより情熱的になるといったことはあ

<sup>6</sup> 性格に関する哲学寄りの業績に Voigtländer 1923 がある。性格への関心は師プフェンダーも共有していた。Pfänder 1924 を参照。

る。また、特に未成年においてはしばしば、エロスの愛と性的衝動が未分化のまま体験される。しかし、両者が別々のものとして体験され、互いに衝突することも多い。異性愛者においても、相手を異性としてエロスの愛すること（「異性愛 (Geschlechtsliebe)」と呼ばれる）と、相手を性的対象として愛する性的愛 (sexuelle Liebe) を区別すべきだと彼女は主張する。ここで彼女は明確に同性愛に言及しているわけではない（同じページの本文でサッフォーの詩を引用してはいる）ものの、当時の社会状況（この論文が出版されたのはナチスの政権掌握と同年）を考えると、ここでの議論は歴史的観点から注意を引きつけるものである。が、ここでは紹介にとどめておく。

### 3. エロスの愛と愛される者の価値

ここまではエロスの愛がどのような心情なのかという「作用面」の分析だった。フォークトレンダーは次に「対象面」に目を向ける (Voigtländer 1933: 152)。ここで問題になるのは、エロスの愛と、愛される対象の価値との間の関係である。

心情は対象の価値と密接に関わる。一般に、肯定的心情の対象は肯定的価値を持つものとして現れ、否定的心情の対象は否定的価値を持つものとして現れる。とはいえもちろん、個人の特定の心情によって、それが向けられる対象の価値が完全に規定されるわけではない。対象の価値は、一方ではそれに向けられる心情に、他方では対象そのものが有する性質に、それぞれ足場を持つ。これらの二つの足場のどちらに重心が置かれるのかは、どのような種類の価値が問題になるのかにも依存するだろうし、どのような価値の理論——実在論か非実在論か第三の立場か——を採用するのかによっても変わってくるだろう。愛される者の価値についてはどうだろうか。そして、フォークトレンダーはどのような立場を取るのだろうか。

彼女による問題の立て方はこうである。「愛は価値によって根拠づけられるのか。すなわち、対象は価値あるものであるがゆえに愛されるのか。それとも、愛のうちで対象に価値が——対象が〈本当は (in Wahrheit) 〉持っていない価値が——与えられるのか」 (Voigtländer 1933: 152)。道徳的価値に関して、「神が命じるから善いのか、善いことを神が命じるのか」という（プラトンの対話篇に由来する）エウテュプロンのディレンマがしばしば議論されるが、ここではこれと類比的な問題が立てられていると言えよう<sup>7</sup>。「価値があるから愛される」という選択肢をとれば、愛される者の価値に関する実在論に立つことになる。「愛が対象を価値あるものにする」という選択肢をとれば、非実在論に立つことになる。

結論から言えば、フォークトレンダーは非実在論寄りの立場をとる。だが、彼女の論述にしたがって、まずは実在論の問題点を見てみよう。シェーラーやヒルデブランドは、価値一般についてそうするのと同じく、愛される者の価値についても実在論をとる。価値は客観的に成立しており、われわれによって発見されたりされなかったりするものである。この立場

<sup>7</sup> エウテュプロンのディレンマについては、たとえば佐藤 2017: 第 5 章を参照。

では、愛は価値を発見する認識的作用であるとみなされるか (Scheler 1973)、価値感得と呼ばれる体験によって見出された価値に対する応答とみなされるか (Hildebrand 1916) のいずれかになる。いずれにせよ、愛とは独立に実在する価値を、われわれは正しく愛することもあれば、愛しそこなうこともある、という描像になる。この描像のもとで、実在論者は、「価値のないものをそう知りつつ愛するのは間違った愛である」とか「より高い価値を持つものはより高い(あるいはより大きな)愛を要求する」といった主張にコミットすることになる。しかし、これらの主張はもっともらしくない、とフォークトレンダーは批判する。価値認識と愛が一致しないことはありふれている。恋愛の相手として無価値だと思っていながらなぜか愛してしまう、とか、素晴らしい相手だと思っているのになぜか愛せない、といった場合である。実在論の説明では、そうしたケースは、正しく価値に応答していないという意味で間違った愛のケースであるということになる。しかし、そうしたケースは何ら逸脱的な愛ではないように思われる。これが、フォークトレンダーが実在論に反対する理由である。

こう考えると、「愛が対象を価値あるものにする」という反実在論的説明の方が直観に適合するところがある。しかし、愛される者の価値が愛によって完全に規定されるという見方もまた、もっともらしさを欠く。そこでフォークトレンダーは、愛される者の価値のうちに、(1) 対象に付帯する質的価値 (qualitative Werte) と、(2) 愛を通じてはじめて対象が持つようになる価値との区別を設ける。後者はさらに、(2a) 照明価値 (Beleuchtungswerte)<sup>8</sup>、(2b) 私にとっての価値 (Werte für mich)、(2c) 近さの価値 (Werte des Naheseins) に分けられる。

(1) 質的価値とは、対象の客観的な(つまり誰かに愛されるかどうかとは無関係に決定される)性質にのみ依存するような価値である。実在論者は、愛される者の価値がフォークトレンダーのいう質的価値に尽きると考え、質的価値は愛の十分な理由をなすと考える(「この人にはしかじかの質的価値がある。ゆえに、私はこの人を愛する」)。フォークトレンダーは質的価値が愛の理由になることは否定しないが、その十分性を否定する。つまり、ある対象にどんなに高い質的価値を認めたとしてもそれを愛さないことは可能であり、愛さないからといって間違っていることにはならない。したがって、質的価値は愛される者の価値のせいぜい一部をなすだけである。

これに対して、(2)のグループに属する価値は、人が対象を愛することによってはじめて対象が獲得する価値である。(2a)フォークトレンダーの比喩的な言い方によれば、肯定的心情は肯定的な光のもとで、否定的心情は否定的な光のもとで、対象を現れさせる。照明価値とは、対象が持つ特徴がそうした光のもとで現れることで、しかもそのときのみ、「構成される」価値である (Voigtländer 1933: 153)。「あばたもえくぼ」という諺を思い浮かべると理解しやすい。ある人がある対象を愛することは、すなわちその対象のある特徴がある肯定的な照明価値を持って現れることにほかならない。(2b)私にとっての価値は、愛一般

<sup>8</sup> 照明価値にあたるものはすでに Voigtländer 1911a でも登場しており、そこでは印象価値 (Eindruckswerte) と呼ばれている。

に含まれる「対象の存在への肩入れ」と関係している。誰かを愛することは、相手を大切な存在とみなすことである。この人格的な「大切さ」が、ここでいう私にとっての価値にほかならない。(2c) 近さの価値は、同じく愛一般に含まれる自分と相手を近づける作用 (Heranziehen/Heranrücken) と関係している。そうした作用の結果として、愛する相手は主体にとって近いものとなり、特別な意義を持つようになる。これが近さの価値である (Voigtländer 1933: 154)。

対象が愛されることによってはじめて持つようになるこれらの価値は、客観的な価値の高低には依存しない。そのようなものを「価値」と呼ぶ点で、フォークトレンダーは愛されるものの価値についての反実在論をとっていると言える。

この反実在論は愛の不合理性を含意するとフォークトレンダーは考えている。彼女は、愛の合理化は一種の錯誤だと主張する。人は、自分が愛する対象が、たんに自分の愛のゆえに価値ある対象として現れているだけでなく、現実にも価値ある対象なのだと考えたがる。これは、自分の心情を合理化したがる一般的傾向のためである。人は対象の魅力に惹かれてそれを愛するようになる。しかし、この魅力 (das Anziehende) を客観的価値と混同してはならない (Voigtländer 1933: 155)。それは対象の質的価値につけ加わるプラスアルファとして、対象と個別の主体との間にのみ現れるものである。対象がもともと高い質的価値を有している場合には、愛する相手が現実にも価値ある対象なのだと思うことは錯誤ではない。しかし、質的価値と魅力、あるいは上の (2) のグループに属する諸価値を混同してしまうと、錯誤を犯すことになる。

そうした愛の合理化の錯誤、あるいは愛の価値を客観化する錯誤は、ありふれたものである。「愛は盲目」という言い回しはここから生まれる。しかし、すべての愛が盲目なわけではないとフォークトレンダーは考える。愛は対象の質的価値の正しい認識と両立する。対象の質的価値を適切に認識した上で対象を愛するような愛を、フォークトレンダーは「真正な愛」と呼ぶ。それは典型的には、「あの人は駄目な人だけれど、それでも私はあの人を愛している」と人が誠実に語るときに表現されるような愛である (Voigtländer 1933: 157)。

こうした愛を「真正な愛」と呼ぶとき、フォークトレンダーの議論は規範性の文脈に踏み込んでいるように思われる。つまり、「エロスの愛はどのようなものか」についての記述的な分析から、「エロスの愛はどのようなものであるべきか」を問題にしようとしているように見える。彼女はおそらくこの二つの問いが全く別の文脈に属するとは考えていない。エロスの愛 (とその対象の価値) についての正確な理解を得ることは、エロスの愛についての偏った見方や、エロスの愛をそれとは似て非なるものと混同する見解を批判することにつながる。「真正な愛」についてのフォークトレンダーの主張は、そうした批判の文脈にあると考えるのが適切だろう。

続く「錯覚的な愛」と通俗プラトン主義についての議論も、まさにこうした文脈に属している。フォークトレンダーによれば、エロスの愛は、対象をある理念価値の具現化とみなすことを特徴としている。愛する人を「天使」と呼ぶ場面に典型的に見られるように、目の前



の相手をたんなる生身の個体として見るのではなく、何らかの理想的なものの象徴として見るような経験が、エロスの愛を特徴づけている。しかし、目の前の相手を素通りしてひたすら理念に向かってしまうような、つまり相手の実際のありように関心を持たずただ美化するようなエロスの愛は「錯覚的な愛 (illusionäre Liebe)」である (Voigtländer 1933: 159)。真正なエロスの愛とはそういうものではなく、そのうちで具体的人格と理想的なものが一体となって経験されるような愛である。

通俗的に解釈されたプラトンによれば、アイデアに向かう天上的な愛こそが真の愛であり、肉体に向かう地上的な愛はそうではない。フォークトレンダーはこうした見方を攻撃する。真正なエロスの愛は、美のアイデアのような純粋な価値に向かうだけでなく、より「地上的な」理想的価値にも向かう。愛嬌がある、可愛らしい、刺激的である、蠱惑的である、小悪魔的である、といった価値をフォークトレンダーは例に挙げている (Voigtländer 1933: 161)。これらは単純に肉体的な性質というわけではない。これらの理想的価値を志向するエロスの愛を、性的衝動と混同してはならない。エロスの愛と性的衝動の混同も誤りだが、エロスの愛を天上的な価値に向かう通俗プラトンの意味でのエロスに押し込めようとするのもまた恋愛の誤った倫理化・審美化である<sup>9</sup>。

#### 4. フォークトレンダーの愛の現象学の哲学的意義

以上がエロスの愛をめぐるフォークトレンダーの議論の紹介である。まとめておこう。1933年の論文で、彼女はプフェンダーの心情心理学に依拠しながら、心情としてのエロスの愛を分析している。まず、好意とは違って自分と相手を近づけようとする作用を含むことや、相手の存在への肩入れを含むことによって、愛一般が特徴づけられる。愛の中でもエロスの愛は特に親密な心情として体験されることを特徴とする。また、フォークトレンダーはエロスの愛を性的なものに還元しようとする見解を批判している。エロスの愛と愛される者の価値の関係について、彼女は反実在論的立場をとり、愛によって構成される主観的価値を、照明価値、私にとっての価値、近さの価値という三種類に区分している。彼女は、本来不合理なものである愛を無理に合理化する態度を批判する一方で、愛は適切な価値認識と両立するものであると主張する。

最後に、こうしたフォークトレンダーの議論を同時代と現代の文脈から評価し、若干のコメントを述べて本稿を閉じたい。

##### (1) 同時代的意義

フォークトレンダーの他の著作についても言えることだが、われわれが主に取り上げてきた1933年の論文も、同時代の哲学者に影響を与えた形跡は見当たらない。しかし、シェ

---

<sup>9</sup> フォークトレンダーはプラトン自身が愛についての通俗プラトン主義者ではなかったことを付け加えるのも忘れていない (Voigtländer 1933: 161 fn.)。

ーラー、ヒルデブラント、フッサールといったいわば現象学運動のメインストリームに属する男性現象学者が愛を一般化と理想化のもとで論じているように見えるのに対して、フォークトレンダーが愛の中でもとりわけエロスの愛に焦点を当て、具体的かつリアリスティックに分析しているのは注目に値する。シェーラーとヒルデブラントの愛の概念については3節で少し触れたが、それらは彼らのカトリシズムを背景とした人格主義的倫理学に組み込まれている<sup>10</sup>。もちろんそれがいけないわけではないが、愛について語ってはいても、フォークトレンダーの議論とは問題関心からして異なると言えよう。フッサールの愛の捉え方は母親の子供に対する愛や学問への愛をモデルとしており、やはり恋愛感情に特有のあり方は捨象している<sup>11</sup>。

筆者の関心からすると、フッサールとフォークトレンダーの関連性についてはもう少し掘り下げてみたいところがある。両者には直接の影響関係はないが、ともに愛されるものの価値について論じている。フッサールは、彼が愛の価値と呼ぶものを客観的価値から区別する（たとえば Husserl 2014: 344-347, 356-359）。愛の価値とは、「対象が特定の自我を触発する固有の仕方に依存する価値」であるとされる。この概念を（主に母親にとって子供が持つ価値を例に挙げながら）導入することによって、フッサールは自らの客観主義的価値論への自己批判を展開する。彼の議論の成否はともかく、愛される者が愛する者にとってのみ有する価値について、それが価値と呼ぶにふさわしいのかどうかも含めて考察することは、意義のある課題である。フォークトレンダーもこの課題に取り組んでいる。フッサールと異なる点は、フッサールが愛の価値を一つのカテゴリーとみなし、その内部により細かい区別を設けてはいないのに対し、フォークトレンダーはエロスの愛に焦点を当て、それとの関連で、愛される者の価値に（照明価値、私にとっての価値、近さの価値といった）より細かい区別を認めている点である。こうしたフォークトレンダーの着眼点は、われわれの情緒的経験と主観的価値（そのようなものがあるとすれば）のかかわりを考える上で、有益な手がかりを与えてくれそうである。この点は、初期現象学研究に限定されない哲学的意義にもつながる。

## (2) 現代的意義

「愛とは何か」という問いをめぐる現代哲学の議論では、情動(emotion)説、情操(sentiment)説、情動と情操のどちらでもないとする立場と、さまざまな立場が議論を闘わせてきた<sup>12</sup>。フォークトレンダーはどのような立場をとっているから見なせるだろうか。彼女は、愛は心情の一種にはかならないとはっきり主張しているわけではないものの、もっぱら心情の一種としての愛について論じている。そして、心情とはプフェンダーによれば顕在的でも潜在的でも習慣的でもありうるものである。現代の感情の哲学および感情心理学の用語（それほど統一されているわけではないが）では、情動と呼ばれるのは心的出来事ないしプロセスであ

<sup>10</sup> シェーラーの愛の概念についてはたとえば横山 2015、ヒルデブラントの愛の概念についてはたとえば浜田 1982 を参照。

<sup>11</sup> 愛および「愛の価値」についてのフッサールの議論は八重樫 2017: 第6章で検討されている。

<sup>12</sup> 愛の本性をめぐるさまざまな立場については、伊集院 2018: 第2章を参照。

り、情操と呼ばれるのは情動を出力する傾向性（しかも、刺激に応じて異なる情動を出力するマルチトラックな傾向性）である。したがって、フォークトレンダーの立場は情動説とも情操説とも言えない。愛は両方のカテゴリーにまたがる概念だという立場をとっていることになる<sup>13</sup>。この立場がどこまで維持可能で、どのような説明力を持ちうるのかは議論すべき問題だが、本稿ではこれ以上論じることができない。今後の課題である。

現代の視点から見てもう一つ興味深いのは、恋愛感情と性的衝動、エロスのなものと性的なものを区別して考えるべきというフォークトレンダーの指摘である。恋愛と性の関係については、ジェンダーと性的指向の多様性を考慮しながら、現代哲学において多くの議論がなされている（たとえば Halwani 2018、Jenkins 2017）。こうした文脈の中で、フォークトレンダーという忘れられた哲学者を再評価し、そのアイデアを展開してみる価値は十分にあると考える。

## 文献

- Hackl, G., 2016, “Dr. Else Voigtländer (1882-1946)”, in Hackl & Sack (2016), pp. 269-271.
- Hackl, G. and B. Sack (eds.), 2016, *Das Frauenzuchthaus Waldheim (1933-1945)*, Leipziger Universitätsverlag.
- Halwani, R., 2018, *Philosophy of Love, Sex, and Marriage*, 2nd edition, Routledge.
- Hildebrand, D., 1916, “Die Idee der sittlichen Handlung”, *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung* 2: 126-251.
- Husserl, E., 2014, *Grenzprobleme der Phänomenologie* (Husserliana, 42), Springer.
- Jenkins, C., 2017, *What Is Love*, Basic Books.
- Marcuse, M., 1926, *Handwörterbuch der Sexualwissenschaft*, 2. Auflage, A. Marcus & E. Weber.
- Nölleke, B. (ed.), 2007-, *Psychoanalytikerinnen: Biographisches Lexikon*. <https://www.psychanalytikerinnen.de>  
(2020年9月8日最終閲覧)
- Pfänder, A., 1913/16, “Zur Psychologie der Gesinnungen”, *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung* 1: 325-404; 2: 1-125.
- Pfänder, A., 1924, “Grundprobleme der Charakterologie”, *Jahrbuch für Charakterologie* 1: 289-355.
- Scheler, M., 1973, *Wesen und Formen der Sympathie* (Max Scheler Gesammelte Werke, 7), Francke.
- Simmel, G., 1923, “Über die Liebe”, in: ders., *Frangmente und Aufsätze*, Drei Maske.
- Uemura, G. and Yaegashi, T., 2020, “Alexander Pfänder”, in: T. Szanto & H. Landweer (eds.), *The Routledge Handbook of Phenomenology of Emotions*, Routledge.
- Vendrell-Ferran, Í., 2008, *Die Emotionen: Gefühle in der realistischen Phänomenologie*, Akademie Verlag.
- Vendrell-Ferran, Í., 2020, “Else Voigtländer”, in: T. Szanto & H. Landweer (eds.), *The Routledge Handbook of Phenomenology of Emotions*, Routledge.

<sup>13</sup> ただし、脚注3で述べたように、顕在的および潜在的な心情と習慣的心情をまとめて心情と呼ぶフエンダーの理論はそもそも整合的でありうるのかどうかという問題がある。

- Voigtländer, E., 1911a, *Über die Typen des Selbstgefühls*, R. Voigtländers Verlag.
- Voigtländer, E., 1911b, “Über die Bedeutung Freuds für die Psychologie”, in: A. Pfänder (ed.), *Münchener Philosophische Abhandlungen*, J. A. Barth, pp. 294-316.
- Voigtländer, E., 1923, “Über die ‘Art’ eines Menschen und das Erlebnis der ‘Maske’”, *Zeitschrift für Psychologie*, 92: 326-336.
- Voigtländer, E., 1933, “Bemerkungen zur Psychologie der Gesinnungen”, in: E. Heller & F. Löw (eds.), *Neue Münchener Philosophische Abhandlungen*, J. A. Barth, pp. 143-164.
- Gregor, A. and Voigtländer, E., 1918, *Die Verwahrlosung: Ihre klinisch-psychologische Bewertung und ihre Bekämpfung*, S. Karger.
- Gregor, A. and Voigtländer, E., 1922, *Charakterstruktur verwahrloster Kinder und Jugendlicher*, J. A. Barth.
- Waithe, M. E. (ed.), 1995, *A History of Women Philosophers, 4: Contemporary Women Philosophers 1900-today*, Kluwer.
- 伊集院利明、2018、『愛の哲学的構成』、晃洋書房。
- 佐藤岳詩、2017、『メタ倫理学入門：道德のそもそもを考える』、勁草書房。
- 浜田恂子、1982、『価値応答と愛：ディートリッヒ・フォン・ヒルデブラントの倫理学』、八千代出版。
- 八重樫徹、2017、『フッサールにおける価値と実践：善さはいかにして構成されるのか』、水声社。
- 八重樫徹、2019、「演出された心情と徳」、『現象学年報』35号、85-93。
- 横山陸、2015、「マックス・シェーラーにおける愛の概念のアクチュアリティ」、『倫理学年報』64号、117-131。

(やえがしとおる・広島工業大学)